

小児科だより vol.14

かぜに抗菌薬は効くの？

2017.10.2 発行

こんにちは。だんだん日が短くなり、朝夕はめっきり涼しく感じるようになってまいりました。小児科外来では、胃腸炎やRSウイルス感染症などのお子さんが増えております。

また、今月から今シーズンのインフルエンザの予防接種も開始いたしますので、お気軽にご相談頂けますと幸いです。

今月のテーマは『かぜと抗菌薬の関係』についてです。

抗菌薬の不適切な使用を背景として、薬剤耐性菌が世界的に増加する一方、新たな抗菌薬の開発は減少傾向にあり、国際社会でも大きな課題となっています。少しショッキングなデータとして、このまま対策を講じない場合、2050年には薬剤耐性菌により、癌を上回る死亡者が発生するとされています。2015年5月の世界保健総会では、加盟各国は2年以内に薬剤耐性に関する国家行動計画を策定することを求められました。これを受け、厚生労働省において、2016年4月5日、我が国として初めてのアクションプランが決定されました。今後、「適切な薬剤」を「必要な場合に限り」、「適切な量と期間」使用することを徹底するための国民運動を展開し、効果的な対策を推進することを強調しています。

医師が外来で抗菌薬を処方する理由に関する調査では、第一位は『患者の希望』（二位は、『二次感染の予防』、三位は、『診断が不確定』）という結果が出ています。その反面、厚生労働省が行った、患者に対する意識調査では、『抗菌薬は、かぜやインフルエンザに効果がないって知ってる？』という質問に対して、半数弱の人が『知らない』という回答をしています。

医学的・科学的な点から、大規模なデータベースを使った研究結果として、かぜとほぼ同じ意味と考えられる急性上気道炎に対して、抗菌薬とプラセボ（外観や味を抗菌薬とまったく同じにした偽薬）を比較した場合、症状の持続期間は変わらず、抗菌薬投与した場合に副作用が増加した、という結果が出ています。とくに乳幼児期の抗菌薬投与は、腸内細菌の働きに悪い影響を与えるとされています。

もちろん抗菌薬はこれまで多くの命を救ってきた薬であり、抗菌薬が欠かせない場合も多く存在します。しかし、『かぜを抗菌薬で治す』とか、『かぜの悪化を抗菌薬で防ぐ』というのは誤った考え方です。患者さんの背景を踏まえたうえで、原因微生物を推定し、適切な抗菌薬を選択し、その後の経過を追うこと。今後、耐性菌による被害を極力抑えるために、ますますこのような考え方が重要になると思われます。

